

# じっきょう 家庭科資料

(通巻 68号)

## みんなで家庭科を

No. **53**

### 巻頭

高校におけるボランティア体験学習の意義と期待

### もくじ／

高校におけるボランティア体験学習の意義と期待	1
里親家庭で育つ子どもたち	7
子育てシェアハウスについて	12

## 高校におけるボランティア体験学習の意義と期待

特定非営利活動法人さわやか青少年センター 理事長 有馬 正史

### 1. はじめに

さわやか青少年センターは、青少年一人ひとりの「生きる力」の根幹となる「人間力」（自ら意欲的に生きていこうとする“自助の力”と、みんなで助け合って生きていこうとする“共助の力”）を、青少年が自ら育むよう広く支援することを目的に設立、活動しているNPO法人です。

青少年が「人間力」を育むには「体験」が重要です。「体験」の場は青少年と社会の接点であり、青少年は様々な体験の機会を得て人々とかかわる中で、意欲や自己肯定感、思いやりの心など、自助力と共助力を育てていきます。

特に、高校時代における「ボランティア体験学習」はこれから彼ら彼女らが近い将来かかわる地域や社会と自らの在り方を確認し、人間力を育むうえで重要な機会となります。

そこで、高等学校における「ボランティア体験学習」の意義と重要性、それを踏まえた「ボランティア体験学習」の進め方などについて記したいと思

ます。

### 2. 「ボランティア活動」の定義と現状

平成4年7月29日の生涯学習審議会答申「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について」においては、「ボランティア活動は、個人の自由意思に基づき、その技能や時間等を進んで提供し、社会に貢献することであり、ボランティア活動の基本的理念は、自発（自由意思）性、無償（無給）性、公共（公益）性、先駆（開発、発展）性にあるとする考え方が一般的である」と書いてあります。

この基本理念は、多くの「ボランティア活動」に共有する特徴とも言えるものですが、現在、ボランティア活動が多様化するにつれて、無償性や先駆性については、その活動によってはかならずしもそうでなければならないとは言えない内容の活動もみられます。有償ボランティアという言葉も出てきています。また、最初は先駆的な活動であっても、その課題が解決されない限り、必要な活動はどれだけ年月を経ても継続して取り組むことが求められます。

高齢者施設で活動する高校生ボランティア  
(鹿児島県肝付町)



先駆性は活動の初期における特徴と言えるでしょう。

「ボランティア活動」について語る時、多くの大人、教師が初めに口にするのは、自発性が大事であるということです。そのために、「ボランティア活動」は個人の自発的な活動であるにもかかわらず、学校が強制的に指導しなければならないのか、という議論も行われてきました。

しかし、その議論が一変したのは1995年1月17日に起きた阪神・淡路大震災でした。延べ130万人以上のボランティアが参加し、「ボランティア元年」(平成22年内閣府防災白書)とも言われました。これをきっかけに、社会や学校においてもボランティア活動の意義が確認されました。東日本大震災においても平成26年3月末日までに延べ135万人以上のボランティア(全国社会福祉協議会・全国ボランティア・市民活動振興センター調べ)が参加しています。しかしながら、日常生活の中での高齢者や幼児、障がい児、障がい者、環境問題、国際支援活動等のボランティア活動については、まだ積極的に取り組むことができているとは言えません。

それでも、学校におけるボランティア体験学習への取り組みは徐々に増えてきています。そのボランティア体験学習が育む力にはどのようなものがあるのか、それを理解することによって高校におけるボランティア体験学習の意義が見えてきます。

### 3. 人間力と社会人基礎力

青少年の「人間力」(自助力と共助力)を育むためには、当センターではボランティア体験学習は大変有効であると考えているということを述べまし

た。その人間力について、国は平成15年4月に内閣府から出された「人間力戦略研究会報告書」において、「人間力」を次頁の表のとおり、社会を構成し運営するとともに、自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力と定義しています。

また、平成18年1月に経済産業省が発表した「社会人基礎力に関する研究会—中間取りまとめ—」では、次頁のとおり、組織や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力として『社会人基礎力』を定義しています。

このふたつの表を見ていただければわかると思いますが、内閣府における「人間力」の構成要素と経済産業省における「社会人基礎力」の能力要素には言葉の違いこそありますが、同じような内容が示されています。当センターの考える「人間力」とも基本は同じと考えていただければよいと思います。

つまり、青少年が「人間力」を育むということは、社会に対応できる礎を育てること、そして、それは彼ら彼女らの幸福につながるということなのです。

### 4. 高校におけるボランティア体験学習の期待と意義

高校生が高校を卒業すると基本的には更に進学するか、もしくは社会人になるわけですが、進学にしてもその先の近い将来ほとんどの人が就職して社会に出ていくこととなります。その時に彼ら彼女らを迎える社会は何を身につけてきていることを期待しているのでしょうか。

それは、まずお互いを理解するための“コミュニケーション力”を身につけていることです。そして、人間力、社会人基礎力の表に示されているような様々な力を身につけていることを社会は期待しています。

併せて、社会が彼ら彼女らに求めているのは職業人としての生き方ばかりではなく、一人の市民として社会に興味関心を持ち、より良い社会をつくる市民としての役割を果たすということも期待しています。

このような社会の期待に応えるためには、ボランティア体験学習の役割は大きく、指導する意義があると行ってよいでしょう。

### 5. 「ボランティア活動」と「ボランティア体験学習」

「2.『ボランティア活動』の定義と現状」で「ボランティア活動」の定義については紹介しましたが、

【表「人間力」】

内閣府「人間力戦略研究会報告書」(平成15年4月)より

「人間力」	
<p>社会を構成し運営するとともに、自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力</p> <p>※ 次のような要素を総合的にバランス良く高めることが、人間力を高めることと定義</p>	
構成要素	内 容
知的能力的要素	「基礎学力(主に学校教育を通じて修得される基礎的な知的能力)」、「基礎的な知識・ノウハウ」を持ち、自らそれを継続的に高めていく力。また、それらの上に応用力として構築される「論理的思考力」、「想像力」など
社会・対人関係力的要素	「コミュニケーションスキル」、「リーダーシップ」、「公共心」、「規範意識」や「他者を尊重し切磋琢磨しながらお互いを高めあう力」など
自己制御的要素	上記の要素を十分に発揮するための「意欲」、「忍耐力」や「自分らしい生き方や成功を追求する力」など

【表「社会人基礎力」】

経済産業省「社会人基礎力に関する研究会・中間とりまとめ」(平成18年1月)より抜粋

「社会人基礎力」		
<p>組織や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力</p>		
分 類	能力要素	内 容
前に踏み出す力 (アクション)	主体性	物事に進んで取り組む力 例) 指示を待つのではなく、自らやるべきことを見つけて積極的に取り組む。
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力 例) 「やろうじゃないか」と呼びかけ、目的に向かって周囲の人々を動かしていく。
	実行力	目的を設定し確実に行動する力 例) 言われたことをやるだけでなく自ら目標を設定し、失敗を恐れず行動に移し、粘り強く取り組む。
考え抜く力 (シンキング)	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力 例) 目標に向かって、自ら「ここに問題があり、解決が必要だ」と提案する。
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力 例) 課題の解決に向けた複数のプロセスを明確にし、「その中で最善のものは何か」を検討し、それに向けた準備をする。
	創造力	新しい価値を生み出す力 例) 既存の発想にとらわれず、課題に対して新しい解決方法を考える。
チームで働く力 (チームワーク)	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力 例) 自分の意見をわかりやすく整理した上で、相手に理解してもらうように的確に伝える。
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力 例) 相手の話しやすい環境をつくり、適切なタイミングで質問するなど相手の意見を引き出す。
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力 例) 自分のルールややり方に固執するのではなく、相手の意見や立場を尊重し理解する。
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力 例) チームで仕事をするとき、自分がどのような役割を果たすべきかを理解する。
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力 例) 状況に応じて、社会のルールに則って自らの発言や行動を適切に律する。
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力 例) ストレスを感じるがあっても、成長の機会だとポジティブに捉えて肩の力を抜いて対応する。

もう少し詳しい説明を加えますと、「ボランティア活動」は「学校教育（学校管理下）及び社会教育活動ではなく、地域や社会で共に困っている問題を解決したいと思った人たちが、個人の自由意思と責任で集まって、利益を得ることを目的とせず、その問題の解決のために取り組む活動」ということではないでしょうか。

このようなボランティア活動を学校で指導するとすると、教師ということになるのですが、平成23年社会生活基本調査（総務省統計局）によると、教員のボランティア活動への行動者率は44.0%で、過半数に満たない状況です。このような状況の中で、知識、経験のない教師が知識、体験のない生徒にボランティア活動を勧めることは難しいのではないかと思います。

そこで、そのような教師には次のように勧めています。

「ボランティア活動」について何も知らない生徒には、まず「ボランティア活動」を学ぶための「ボランティア体験学習」が必要です。その中で、教師も生徒といっしょに「ボランティア活動」について学び、「ボランティア体験活動」に取り組み、ともに体験していただくということです。

★「ボランティア体験学習」

学校教育及び社会教育の場で行われる教育活動として、ボランティア体験学習があります。生徒が地域の人たちやNPO団体などと交わるなどして様々なボランティア体験活動に取り組み、ボランティア活動やその意義、社会（地域）等について学び、人間力（自働力と共働力）を育む一連の教育活動です。

- ・ボランティア活動（大人）
- ・ボランティア体験学習（生徒）
  - ボランティア体験活動
  - サービスマーケティング（6.で紹介）

しかし、一過性のボランティア体験活動では、生徒の心の中からすぐに忘れ去られてしまいます。そこで、現在脚光を浴びてきているのが、「サービスマーケティング」です。

6. サービスマーケティング

ボランティア体験学習は、これまでは単発的な体験活動が主でしたが、「サービスマーケティング」は地



子どもたちと遊ぶ高校生ボランティア（山形県舟形町）

域の課題を解決するために“継続的”に取り組むボランティア体験学習の「地域課題解決学習」です。ボランティア活動にその日だけ取り組む体験的な学習活動ではなく、地域の課題の解決に向けて継続的に取り組み、その課題の解決を図ることで、達成感、充実感とともにより積極的な学びを促すものと言えます。

実は、これまでも「サービスマーケティング」と言えるようなボランティア体験活動は行われています。ここでは中学校の事例を紹介します。

中学生たちは自分たちの住む町に継続的に車イスに乗って出かけ、車イスが通るのに不便なところを地図上にマッピングして町の行政に提出しました。それによって、不便な道路などの改修が行われ、バリアフリーのまちづくりに貢献したのです。

このような活動は、これまでは教師に「サービスマーケティング」の知識がなかったために「ボランティア体験活動」とされてきていました。しかし、地域の課題解決に貢献するという点ではまさしく「サービスマーケティング」です。これからは、積極的に「サービスマーケティング」の取り組みが行われることが期待されます。

では、もし家庭科において「サービスマーケティング」に取り組むとしたらどのような活動の展開が考えられるでしょうか。例えば、高校のある地域の一人暮らしの高齢者の食事について考えてみましょう。民生委員の協力を得て地域の一人暮らしの高齢者に食事についてのアンケートを実施し、どこに問題があるのか分析して、課題と解決策を行政に提案するというようなこともできます。行政とともに課題解決

に向けて継続して取り組むというような展開も考えられるのではないのでしょうか。高校生ならではの「サービスマーケティング」が期待されます。

7. 終わりに

高校生に社会が求めていることは、「4. 高校におけるボランティア体験学習の期待と意義」でも述べましたが、職業人として、また、市民としての人間力を身につけることであり、社会人基礎力の向上なのです。これらの期待に応えるためには、ボランティア体験学習をどのように展開していけばいいのか、教師の役割は大きいと言えます。ボランティアの世界で言われている言葉があります。“失敗を恐れない”ということです。失敗からの学びは、よりたくましい「生きる力」を育ててくれるでしょう。

当センターでは、このようなボランティア体験学

習を成功させるためのひとつのツールを提供していますので、それを紹介いたします。

【『ふれあいボランティアパスポート』の紹介】

さわやか青少年センターでは、小中高等学校等における児童、生徒のボランティア体験学習の“きっかけ”と“継続”に有効なツールとして、「ふれあいボランティアパスポート」（以下FVPという）を無償（但し、送料は学校負担をお願いしています）で提供しています。パスポートサイズの三つ折りのボランティア活動の記録帳です。

このFVPの特徴は、生徒が行ったボランティア体験学習について記録し、感想を書いた上で、FVPに記載された社会貢献団体一つに○をつけて提出すると、FVPの支援企業・団体からその社会貢献団体に一定額が寄付されるという点です。詳細は、当センターのホームページでご覧になれます。

(ふれあいボランティアパスポート)



## ⑥ みんなで家庭科を

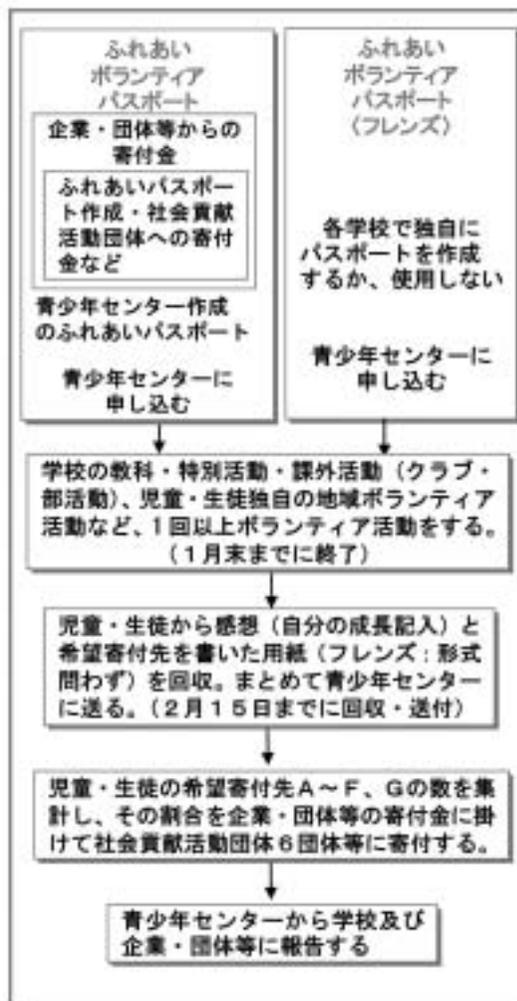
平成26年7月20日現在のFVPへの参加の状況は、小中高等学校合わせて116校、3団体。参加児童生徒数は35,546人という状況です。高等学校の参加数は10校です。

当センターでは、FVP参加校・団体に対してボランティア体験活動感想文の募集も行っています。テーマはボランティア体験活動を通じての自分の気持ち、成長です。この感想文募集は生徒自らの活動への振り返り、リフレクションを期待して行っています。

「ボランティア活動は当たり前のこと」と済ますのではなく、褒める、認めていくことが次の活動への意欲を喚起し、自助力、共助力を青少年が自ら育むことにつながるのです。

これからボランティア体験学習を始めたい、活発にしたいとお考えの先生方にこのFVPをご活用いただきたいと思います。

### ふれあいボランティアパスポートの流れ



**問い合わせ・申込み先**

特定非営利活動法人さわやか青少年センター  
 〒105-0011 東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階  
 特定非営利活動法人さわやか青少年センター分室  
 ふれあいボランティアパスポート事業担当  
 TEL03-6809-2795 FAX03-6809-2796  
 URL : <http://www.ssc-npo.or.jp>  
 E-mail : [info@ssc-npo.or.jp](mailto:info@ssc-npo.or.jp)